

# 所謂鐘崎式土器の層位出土の新例（小池原式の設定）

— 縄文後期小池原遺跡 —

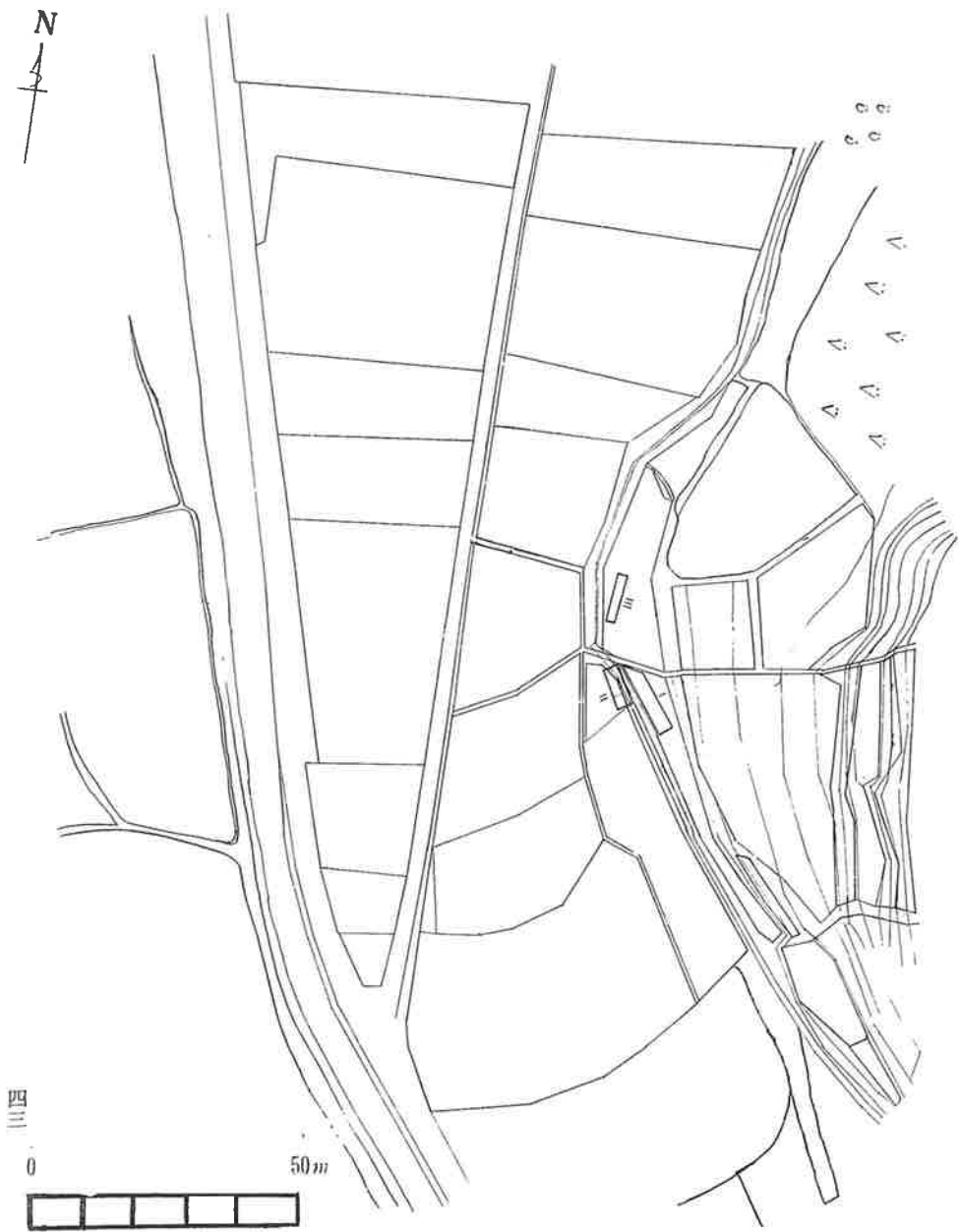
賀 川 光 夫

## はじめに

日豊線高城駅の東南一軒に存在する小池原貝塚の調査は、鶴崎市教育委員会（現在合併により大分市編入）の依頼によつて昭和三十六年実施された。当遺跡の発掘は、この地方が工業地帯の造成によつて、いずれ破壊されることを予測して実施されたもので、結果として、二つの貝塚から、縄文後期、磨消縄文土器の層位的出土によつて、それぞれ遺物の先後関係を明確なことを得た。所謂鐘ヶ崎式土器と汎称する縄文後期土器を、あらためて小池原式土器として類形式の類別を可能にした点で興味をよぶ。以下小池原式土器の設定にともなう調査所見をかかけて概報する。

### 一、小池原貝塚の位置と状態

東九州の中心、そこには大分、大野川の二つの主流が、別府湾に注ぎ、その沖積平野に大分、鶴崎の二つの市街地を形成する。この二つの市街地を結んで目下新産部大分工業地帯の形成に砂州の埋立工事が行われ、近く一大工業地帯が形成されようとしている。九州山脈の支枝が東に延び、その尖端に洪積世の段丘が、両河川の間を舌状にのびるところ、更に小谷を刻み舌



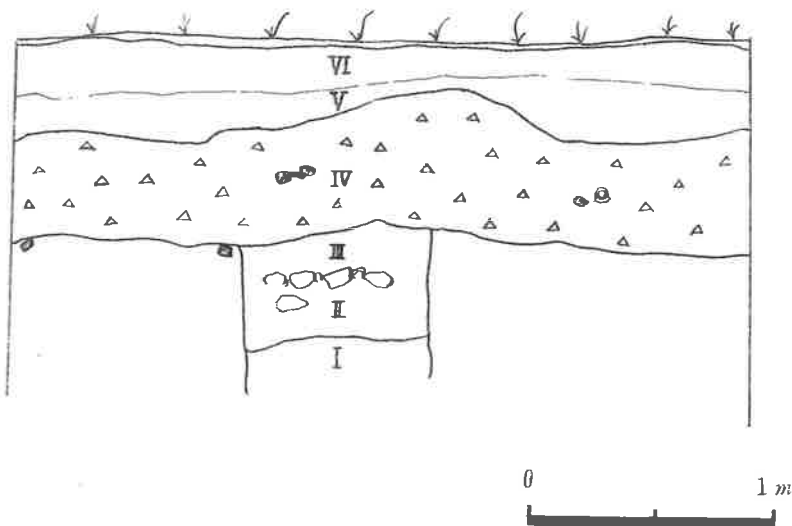
第一図 小池原遺跡附近地形図 1m等高線

状丘陵に新しい礫文様をみせる。この小川の狭い谷の西側、鶴崎段丘の北端附近に小池原貝塚が位置する。遺跡は段丘の北端から二〇〇米、南北に開新された小谷の西側、緩傾斜面に存在し、小川の底部より五米程高地に位置する。(第一図)

遺跡は南北に走る小川より六〇米、同じく南北に走る段丘線辺(低地までの比高四米)に沿つて二つの貝塚をみる。貝塚は南より第Ⅰ、第Ⅱと呼び、前者は巾三米、長さ一六米で、後者は巾四米、長さ一一米に及び、その間を農道で仕切る。貝層は地形にそつて西側に厚く、二五度の傾斜をもち、その崖辺で一米、崖辺より四米東側で消滅する。発掘溝は、第ⅠトレンチをⅠ貝塚の崖辺一米を除いて南北に一五米、巾三米、ⅡトレンチをⅠ貝塚に同様崖辺二米を除き南北一〇米巾二米に設定、それぞれ貝塚下部粘土下一米(Ⅰ貝塚の一部で二米)に及ぶまでを発掘した。その結果、Ⅰ・Ⅱ貝塚共に同じような層位をなし、遺物の包含については、Ⅰ・Ⅱ貝塚で若干の相異を觀察した。

## 二、層位

貝塚は、大きく分けて、六層に分類される。即ちⅥ層耕土下二八糎、黒褐色土層で遺物の散布が少量。Ⅴ層、平均一二糎程の混土貝層で貝類の破碎されたものを混ぜ、土器類の包含を見る。Ⅳ層は六四糎の純貝層で、カキ、ハマグリ類が多数を占め、多量の遺物を包含する。Ⅲ層はⅤ層同様混土貝層ながら破碎貝類を含まない、層の堆積は二〇糎で下部河石の上面に至る。Ⅱは礫層。Ⅰ層は小礫混りの褐色土層である。このⅥ層までの層の序列の中で、Ⅰ・Ⅱ層は前面小谷中の小川の水位が上昇していた当時の河床に累積した小石又は礫の層であつて、この旧河床より現河床の比高は三・七六米を算えることができる。したがつて貝塚の成立はこの旧河床の上部において行われたことになるが、当時の河床は段丘縁崖上、現河床より二米程度上位の現水田面附近を流れていたものと推定される。Ⅲ層、Ⅴ層までの貝層は、それぞれ異なつた、状態で累積されており、層の堆積はそれ自身新旧をあらわすことは当然である。この貝層上部のⅥ層の黒褐色土層は、貝類遺棄後今日までの間に累積した土類であつて、その成因は、段丘高所からの流出土による堆積か、新しい火山の降灰によるものか判断し得ない。貝塚成立の時



第二図 層位 (第1貝塚3区)

期が旧河床の上部であることから、VI層の堆積は縄文後期以降における以上の二つの成因による可能性は極めて強い。段丘の上面は時代と共に少しづつではあるが解析されつつあることを考えると、VI層の堆積は貝塚成立後の高所より土類の堆積によるものと想定することは無理でない。

### 三、遺物包含層と土器の特徴

さて遺物包含層はI、II貝塚で、若干の相異をみた。主にIII—V層に限られて貝層より出土する遺物は、九州の特異な磨消縄文で、鐘ヶ崎式土器として知られたものであった。II貝塚は貝塚下部、即ちIII層の礫層上位にIV層とかりに名付けた褐色土層が存在し、その層中よりわずかに胴部の張りをみとめる鉢型土器が出土する。本貝塚における最も古式土器で、全面貝殻条痕を横に走らせて器面の調整を行う。文様は五耗程度の沈線を口縁部に四本併列させ、その上部一〜二本間に巻貝角頂にて刺突した列点交を施す。胴部には三本の同様沈線を組に上下二段横走させ、中央には、上線を口縁部沈線文下端から発する巻返り文様を組む。口径三二種の比較的大形の鉢形土器は、焼成良好で、内壁はよく研磨されて、輪積部の痕をみ出し得ない。この沈線組合せ文様の鉢形土器を層位的にみるとき、

本遺跡出土土器中、もつとも古式に属するものと推定することができる。

I 貝塚Ⅲ、V 層には、その形態が鐘ヶ崎式土器と汎称される形式の鉢形土器が層序的に発見される。その土器は、口縁部外反し、胴部球状に張り、底部わずかに上り底をなす類で、一部に橋状把手を持つ。Ⅲ層混土貝層には、大型土器の類が出土し、口径四四糎を算える。文様は山形に隆起した部位に山を巻き裏面に達する沈線を含めて三本の沈線を施し、更に橋状部に巻文の返り短線文をみる。文様の主体は頸部より胴部にわたる沈線文で、下部の一線の間に戻り沈線を上、下交互に施して器面を飾る。器壁の調整は貝殻条痕をもつて行ひ、縄文を施文しない。

IV 層出土の同式土器は、同器形ながら、やや小型、胴部文様が入組文様で線を主体とする。橋状把手を初め、口縁部などに縄文を施し、線刻間を磨消して文様効果をあげ、所謂磨消縄文の施文顕著なものである。V 層土器は、同形ながら一段と小形化し口径二六糎、橋状把手を欠く。文様は入組文を主体に曲線をもつて構成し、IV 層同様磨消縄文をみる。

II 貝塚Ⅲ—V 層の遺物は変化なく、口縁部より平底の小鉢型で、わずかに小丘をもつて山形隆起部をとどめる。口径二四糎底径一〇糎、二本線を基調に、曲線で壁面を飾り磨消部が広く、線間に縄文施文をみる。口縁の山形隆起部巻線文の残置など I 貝塚、Ⅲ—V 層までの形態、施文様相を受ける。

以上の如く、II 貝塚Ⅲ層、I 貝塚Ⅲ層、IV 層、V 層、II 貝塚貝層のそれぞれ出土遺物は基本的に同一の系列に統一される器形の單純出土であるが、それぞれ特徴を異にした土器を主体に包含されている。この土器の相異は貝層堆積の順位を立証するといつてもよく、貝層序列即ち堆積の新旧をしめす。したがつて右の順位は土器の古さの順位であつて、形式の相異は土器形式発達的過程をしめしている。

#### 四、所謂小池原式土器の設定

本貝塚出土の土器を層別に分類すると左の如くなる。

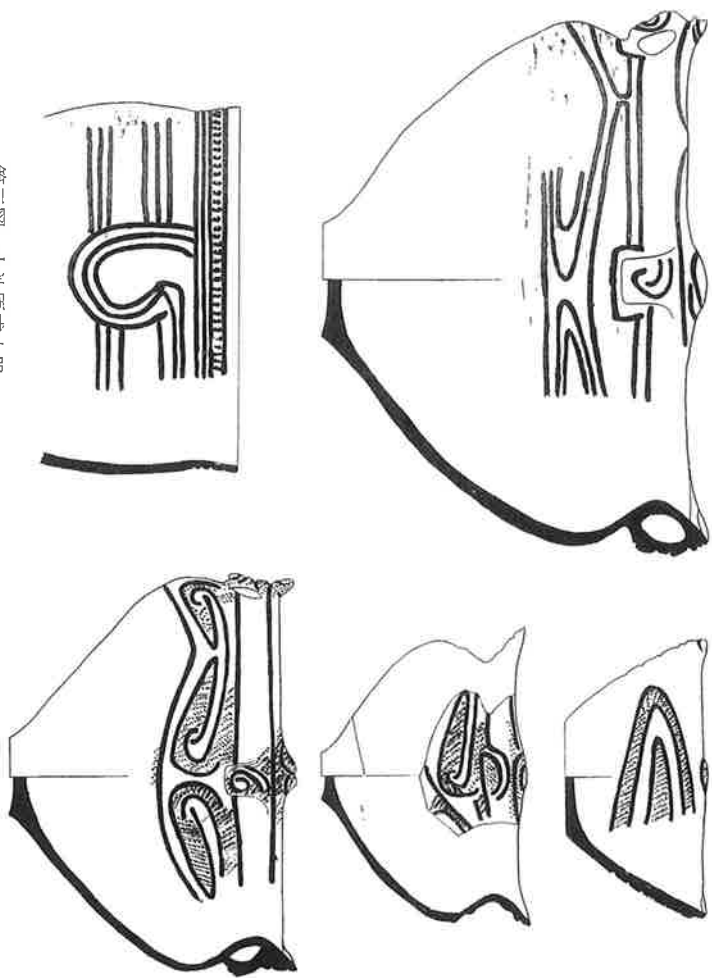
- (1) II貝塚III層、条線、巻返し縁文を有する深鉢型土器（小池原一式）
- (2) I貝塚III層、線文を施し橋状把手をもつ鐘ヶ崎系鉢形土器（小池原二式）
- (3) I貝塚IV層、線文と縄文をもつて文様を構成し、橋状把手をもつ鐘ヶ崎系土器、（小池原三式）
- (4) I貝塚V層、線文と縄文をもつて文様を施すこと三式と同様であるが、橋状把手をもたない。（小池原四式）
- (5) II貝塚貝層、線と縄文とで文様を構成するが、所謂鐘ヶ崎系の退化形態、（小池原五式）



○は鎌木氏、平城貝塚実測番号

右の如く本遺跡出土の土器は層位によつて的確に把握され、土器形式の発達もきわめて合理的である。特に一式を除いた二式―五式は器型が所謂鐘ヶ崎系土器で、二式以下器形の漸小化、磨消縄文の施文登場などに興味深い。

一式は、独立した深鉢形土器であるが、施文法に一つの関連要素をもちいている。即ち条線の巻返し文様は、鐘ヶ崎系土器における、巻文、入組文などの文様構成と非常によく似たもので、むしろ、巻文、入組文などの文様構成的モチーフとも考えられる。その意味では鐘ヶ崎系土器の祖型とみるべき土器で、鐘ヶ崎土器論構成上必要な形式である。この一式は、現在の九州においては類似形態に乏しいが、福岡県山鹿貝塚<sup>①</sup>、岡山県福田貝塚<sup>②</sup>などに類例を僅少なからみることが出来る。又宮崎県

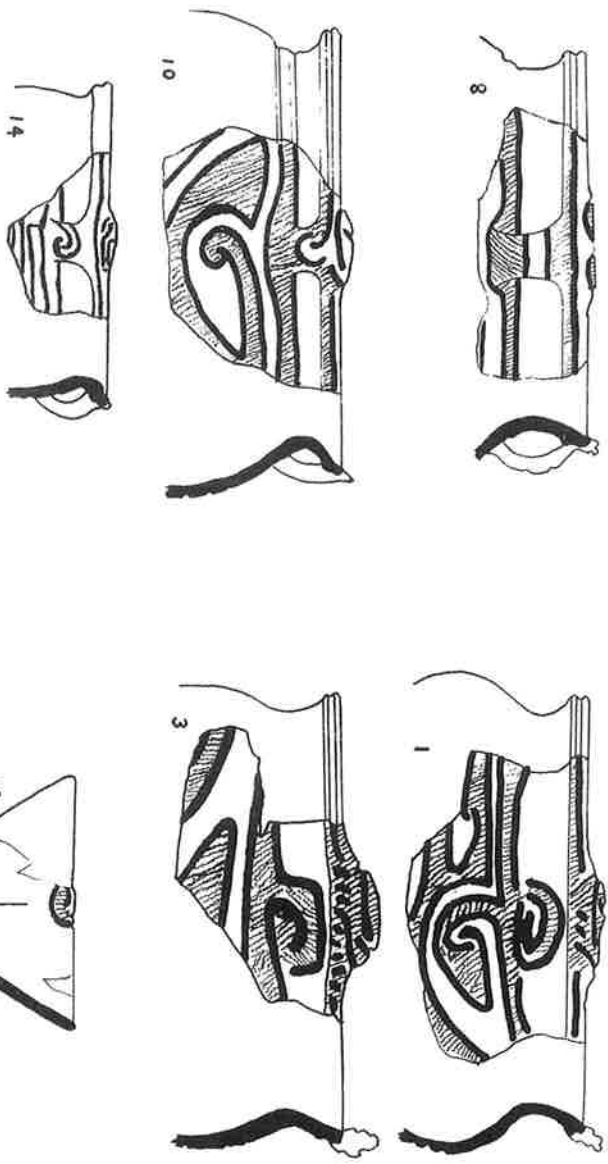


第三图 小池原式土器

20cm

0

- 1. 2 貝塚Ⅲ層 5 式
- 2. 1 貝塚Ⅴ 4 式
- 3. 1 貝塚Ⅳ層 3 式
- 4. 1 貝塚Ⅲ層 2 式
- 5. Ⅱ 貝塚Ⅲ層 1 式



第四図 四国平城貝塚出土土器実測図(鎌木、西田両氏報告書より一部転写)

綾遺跡出土土器<sup>③</sup>にも一部共通要素があるので、縄文後期初頭における一形式と判断される。東九州における鐘ヶ崎系土器の中  
 豊後高田市森貝塚、来縄貝塚などは三、四式土器、国東ワラシノ遺跡は四式に分類される。<sup>⑤</sup>

近時四国平城貝塚の土器整理にあつた鎌木義昌・西田栄両氏による、平城貝塚第一類は、小池原貝塚により完全に層位分



類されることになった。報告書中、第一類実測図中、⑭は二式、⑧⑩は三式、①③は四式、⑫は五式ということになり、ここに小池原貝塚の層位を標式する理由が生れるのである。小池原貝塚の層序は具体的遺物の新旧を分け、土器成生発達の理論的構成に約立つところ大である。

## おわりに

小池原遺跡の調査によつて結論的には左の如き問題を考えることができた。

- 1、九州の縄文後期における磨消縄文の発達についての祖形的な遺物の発見がなされた。
- 2、鐘ヶ崎式土器として把握していた後期土器を層位的に類別し、その先後関係を決定しなかったこと。
- 3、同式土器の成生、器形の変化、文様の推移など、それぞれ層位によつて顕著な特徴をもつこと。
- 4、これら磨消縄文文化の広りは瀬戸内以西においてたえず共通なものとして発達してきたものであり、それを統一する必要上、ここに小池原式土器という標式語を附し、一―五式の類別を行うことを提案する。

以上簡単に小池原式土器の設定についてのみ述べたが、本遺跡の報告は、いずれ時期をみて精度な観察をこころみることにする。

注 ① 福岡県遠賀郡山鹿貝塚の発掘は昭和三十七年六月福岡県教育委員会で実施され、後・前期各文化層を層位で発掘した。いずれ精細の報告がある。

② 鎌木義昌『日本考古学講座』第三卷「縄文・中国」河出書房

③ 鈴木重治「宮崎県下の縄文土器」『宮崎県立博物館報』第五号

④ 樋口清之「大分県西国東郡河内村森貝塚の研究」『史前学雑誌』第三卷一号

⑤ 賀川光夫「大分県東国東郡国東町ワラミノ遺跡調査報告」『大分県文化財調査報告』第六集

⑥ 鎌木義昌、西田栄『伊予平城貝塚』愛媛県郵政町教育委員会

(この研究は鶴崎町より研究費の一部を受けた)